

大正から昭和にかけての建築家の言説 その1

キーワードよりみる建築思潮の変遷

○ 正会員 近藤 正一^{*1}
 同 柏瀬 八峰^{*2}
 同 張 突文^{*3}
 同 若山 滋^{*4}

【序論】 建築家は実際の建築設計とともに、言語活動を通して自己の思想を表現しており、その活動の場の一つとして建築雑誌がある。

大正から昭和初期は西洋風様式からモダニズムが導入され、日本的な近代様式が模索された転換期であった。

そこで本研究では大正から昭和初期の全国的な建築誌である『建築世界』に掲載された代表的な近代建築家の言説を分析し、西洋、日本、近代が錯綜する当時の言説における建築思想の潮流を明らかにする。

【研究対象】 対象とする建築家は、『日本近代建築史再考』^{*1}の中で、重要な建築家として選ばれた101人、及び主要な建築論として選ばれた101の評論の寄稿者の中から『建築20世紀』^{*2}での作品の紹介も考慮しつつ、42人の建築家を選定した。なおそれに含まれていないものも若干名あるが、それは重要な建築家、評論家の匿名での寄稿である。対象とした評論は大正期136、昭和初期75の計211である。

【言説の分析】 まず、対象とする評論から建築觀が明確なキーセンテンスを選定する。その中から特に主題となる言葉を選定したところ、大正期は53、昭和初期は51のキーワードが抽出される。数量的に考察するため、これらについてさらにグルーピングを進めたところ、キーワードは15のカテゴリーに分類される。(表-1)

【統計的考察】 建築思潮の時代的変遷を表すため、各時代毎のカテゴリーの頻度をグラフ化する。(図-1)

・大正前期 様式主義者による言説が大きな割合を占める大正前期は、様式主義者による「建築家」の職能確立と「様式」をめぐる議論が中心であり、構造派の言説は「住宅」「都市」に関して際立っている。これらはいずれも「社会国家」への貢献を軸として展開していた。

大正初期の様式主義の時代は、大正8年の議院建築設計競技の失敗を契機に一挙に新様式を標榜する勢力が拮抗するようになる。図から、まさにこの時「近代」に関する言説が現れることがわかる。

・大正中期 大正中期になると、大正9年の分離派の出現によって、建築界は「社会国家」への貢献をめぐる様式主義と構造派の構図から分離派(表現派)をも交えて近代と様式が拮抗する三極構造へ転換した。「構造」「近

代」「様式」のほぼ拮抗する状況が見て取れる。

・大正後期 大正後期は「構造」に関する言説が増大するとともに「芸術」が大きなテーマとなっている。また「様式」は次第にテーマから離れ、「近代」の比率が増大している。また「人間」が一定の比率を占めているが、これは構造派優位の中、芸術派による様式主義批判が大正ヒューマニズムを軸として展開した時代であることを示すものである。

大正12年、「構造」が飛躍的に増大し、その直後に「芸術」が増大している。これは大震災によって様式主義が足下から瓦解し、旧世代が構造派優位へと一挙にシ

表-1 キーワードのカテゴリー分類

カテゴリー	キーワード(例)
建築家	建築技術家、工人、懸賞競技、建築士会、建築条例、市街地建築物法、エンジニア
住 宅	住宅改良、有機的生活の完成、生活の容器、「生活最小限の住居」、「生長する家」
様 式	西洋の直輸入、議院建築、美術建築、日本式、数寄屋普請、過去の様式、永久的建築
近 代	セセッション、新様式、機能主義、分離派、帝国ホテル、朝日新聞社の建築、閑暇
構 造	鉄筋コンクリート造、煉瓦造・石造、耐震耐火、構造万能論、構造派、乾式構造
芸 術	総合芸術、理想の建築美、創作、バラック装飾社、比例の美、外観、形、プラン
日 本	世界、わが邦、民族的自覚、反動的思想、日本特有の雰囲気、伝統、吾らの文化
都 市	都市の美観、田園都市、都市計画事業、市民、市街建築、マンハッタン、輝く都市
功 利	用、実用性、経済、宣伝、「ザッハリッヒカイト」、合目的性、建築の機能的要求
科 学	合理的、客観性、度量衡、規範的合法性、建築の形式化、工業、機械、科学的精神
社会国家	国家社会の公利公益、国運、社会的奉仕、教育制度、社会意識国家観念、国策
震災復興	滅び去った旧東京、大震大火、大地震の試練、帝都復興、理想的帝都建設
イデオロギー	ブルジョア、浪漫性、創字社、紀念性、階級性、歴史的制限性、風土的民族的構造
時代思潮	時代の要求、狂風暴雨、潮流、「東亜新秩序の建設」、新しき時代、防空色の要求
人 間	忠孝、新徳、人生神秘、自己主義、人間の文化、人間性の実体

Discours of Architects from the period of Taisho to Showa part 1

Change of Architectural thought on Keywords

KONDO Shoichi, KASHIWASE Yatsumine, ZHANG Yiwen and WAKAYAMA Shigeru

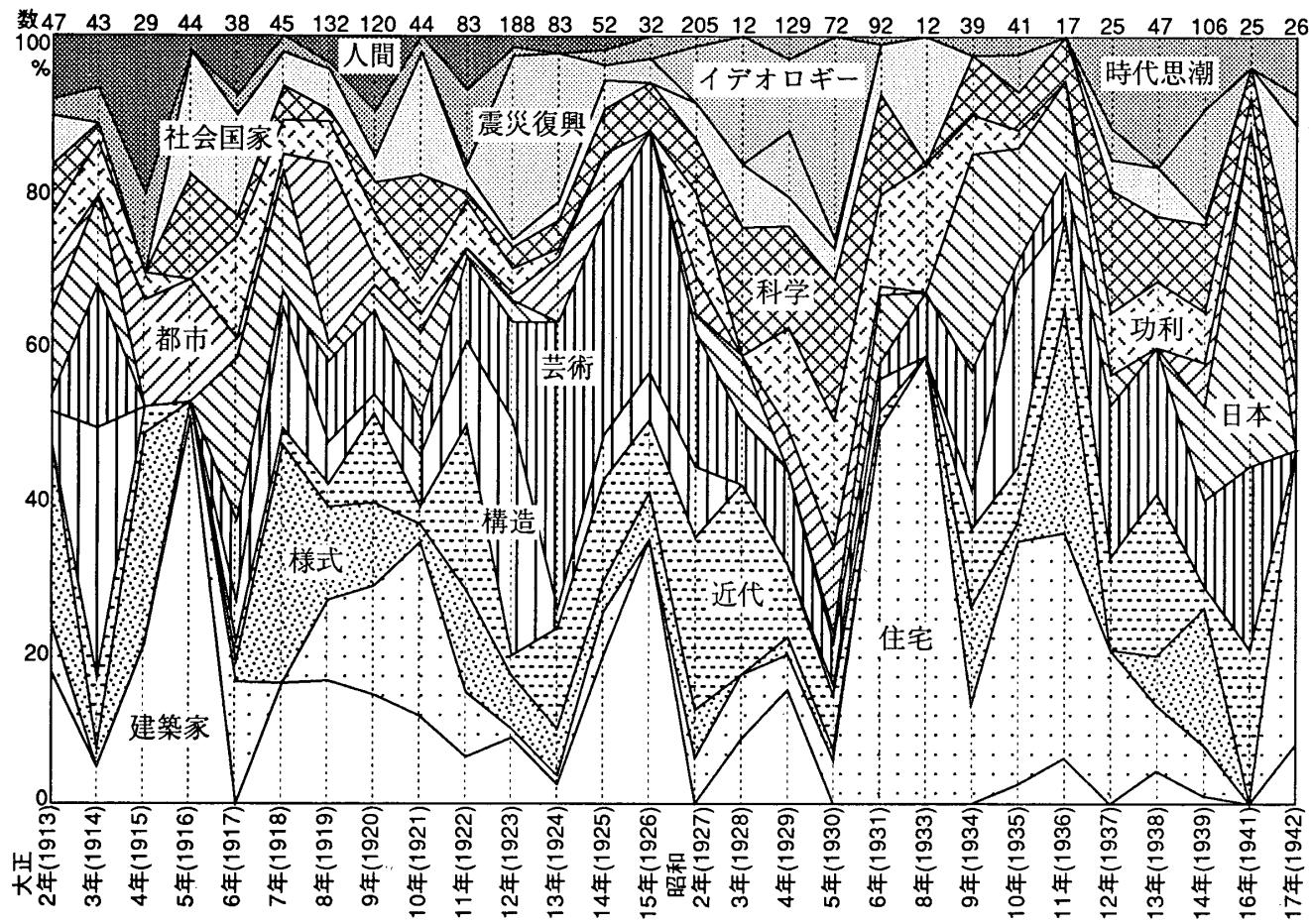


図-1 カテゴリー割合経年推移図

トした直後、新しい芸術派が西洋直写という観点から様式主義を批判して台頭したことを表している。様式主義と構造派の旧世代と表現派（分離派）の新世代との拮抗ともみることもできる。

・昭和初期 大正から昭和への時代の変わり目は建築思潮を大きく展開させることになる。それは大正ヒューマニズムの論客の建築論壇からの退場であり、代わって昭和期を代表する極めてイデオロギー色の強い科学主義の論客の台頭である。昭和初頭にとりわけ「イデオロギー」が大きな比率を占めることからわかる。

震災後の浪漫的な「表現派」は、表現否定の「モダニスト」へ大きく変貌してゆく。分離派はこの両者のはざまに立つ運動であったといえる。これは大正から昭和への時代の変わり目で、「芸術」が急激に減少し、代わって「近代」及び「科学」が飛躍的に増大することから明らかである。

昭和6年頃から「住宅」「社会国家」「功利」「日本」がほぼ同時期に台頭するが、これからも戦時下の民家の研究や住宅の改良は「国策」と連動するものであり、イデオロギー色の強いものであったといえる。

*1 名古屋工業大学助手・修士（工学）

*2 修士（工学）

*3 名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士

*4 名古屋工業大学教授・工学博士

昭和10年以降になると時代思潮は戦時体制へ向かう中で、「日本」が特に比率が高く、まさに「日本回帰」の時代思潮を反映している。しかし、同時に「科学」の比率も高く、モダニズムと日本回帰が決して矛盾したことでもなかつたこともわかる。「近代」の比率が相変わらず高いのは西欧のモダニストの言説が盛んに紹介されたことの反映である。

また大正期と、昭和初期について全体的に比較すると、大正期は「建築家」「様式」「構造」、昭和初期は「住宅」「近代」「科学」のポイントが高い。カテゴリーを入れ替わる大正期の「人間」と昭和初期の「イデオロギー」については時代思潮の特色が反映しているといえる。

【結論】 大正から昭和初期の建築觀の展開は、「構造」や「芸術」といった実際の建築に直結したテーマとともに、「大震災」「戦争」などのエポックや、「ヒューマニズム」「科学主義」といった「イデオロギー」などの時代思潮と密接に関係しつつ変遷したといえる。

*1 村松貞次郎、近江栄、山口広、長谷川堯 編、新建築社

*2 鈴木博之、中川武、藤森照信、隈研吾 監修、新建築社